

Newsletter 33

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第33号 / 2018年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 日吉主義者—羽田功先生と舞踏公演のこと
特集I 基盤研究「教養研究」「情報の教養学」
特集II 「日吉学」「日吉行事企画委員会（HAPP）」
特集III 「庄内セミナー」「ガドベヤ」
特集IV 「日吉キャンパス公開講座」「学習相談」
特集V 研究サポート「研究の現場から」読書会「晴読雨読」
活動予定 11月～2019年3月
私の〇〇自慢



日吉主義者—羽田功先生と舞踏公演のこと

教養研究センター所長
小菅隼人（理工学部）
Hayato Kosuge

2018年6月の大学評議会で承認され、10月より教養研究センター所長として三期目を務めることになりました。副所長には、片山杜秀法学部教授（三期目）、高橋宣也文学部教授（二期目）に加えて、新任として荒金直人理工学部准教授が就きます。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。さらに、本年度から日吉キャンパス公開講座運営委員長に寺沢和洋医学部助教、「生命の教養学」企画委員長に西尾宇広商学部准教授が就かれて、教養研究センターは確実に若返りを始めていますが、一方、教養研究センターを立ちあげ、初代の所長を務められました羽田功経済学部教授が今年度をもって定年退職をされます。10歳近く先輩ではありますが、羽田先生への敬意と友情をこめて個人的な思いを書かせていただきます。

教養研究センターにおいて私が羽田先生と最初に、そして、もっとも深くかわったのは日吉行事企画委員会（HAPP）においてです。HAPPは、もともと1990年代にはじまった入学歓迎行事（入歓）を源流とします。その中でもとりわけ、舞踏公演は現在まで続いており、慶應義塾大学のみならずダンス界の名物行事となりました。教養研究センターも来往舎もなく、「ゴガク・パンキョウ」と蔑まれ、明らかに存在した三田／日吉の「格差」を自嘲的に受け入れるしかない雰囲気の中で、羽田先生は新しい教養の形を模索され、大学のキ

ャンパス（第六校舎・記念館）で、当時キワモノ扱いをされていた暗黒舞踏をもって新生に対して同僚教員に対してもショックを与えるという荒療治を思いつかれました。これは誰も考えつかなかったことですし、企画が起ってから、物理的に実現できるとは思っていませんでした。しかし、『御殿、空を飛ぶ』（1994）から『宇宙の花』（2000）まで、当時舞踏界の最高峰にいた大野一雄が七回にわたって、慶應義塾大学日吉キャンパス入学歓迎行事に出演して、学生のみならず教員たちにも教養の可能性を示してくださいました。その企画は全て羽田先生が中心になって進められました。その後、再組織化された日吉行事企画委員会（HAPP）委員長として新生歓迎行事の継承を私が託されましたが、私は、舞踏公演を核として、日吉の自主企画を発展させたいと考えたので、和栗由紀夫『野の婚礼—新しき友へ』（2003）で舞踏公演を復活させ、それから途切れることなく舞踏界の重鎮たち—大野慶人、笠井叡、中嶋夏、小林嵯峨、ビショップ山田、雪雄子、室伏鴻、山本萌、長岡ゆり、岩名雅樹—が登場してくださっています。

羽田先生は、教養研究センター所長を務められた後、経済学部日吉主任、日吉メディアセンター所長、慶應義塾高等学校校長を歴任され、その見識と行動力によって、日吉が慶應の「土台」であり、日吉こそ慶應の教育の中心にあることを示してくださったと思っています。その意味で私は、勝手に、羽田先生を「日吉主義者」と呼んでいますし、私もそうありたいと願っています。今後も折に触れてご助言をいただきたいと思いますが、まずは、日吉を愛する教員として羽田先生に心から御礼を申し上げます。



基盤研究「教養研究」

シンポジウム:「藝術と教養」

2018年6月2日13:00～17:00、来往舎シンポジウムスペースを会場として、藝術学関連学会連合（藝関連）と慶應義塾大学教養研究センターの共催で、藝関連第13回公開シンポジウム「藝術と教養—藝術は教養たりえるのか?—」が行われました。「藝術学関連学会連合」というのは、芸術に関連する15の学会の連合体です。この共同シンポジウムはテーマを変えつつ2006年より毎年行われていますが、今回は、藝関連側では日本演劇学会が幹事学会となり、教養研究センターとの共催で、企画・会場・運営を提供しました。当日は、永田靖日本演劇会長が挨拶、小菅が趣旨説明を行った後、第1部では、塚田章（意匠学会・京都市立芸術大学教授）「インダストリアル・デザインと教養」、山下純照（日本演劇学会・成城大学教授）「教養の変貌—現代演劇における」、山口遙子（美学会・東京藝術大学専門研究員）「芸術を教養として学ぶこと—1760～1770年代の『愛好家向け』アルファベット式芸術事典に即して」、佐藤康宏（美術史学会・東京大学教授）「知識人の絵画—南画とその享受者」の各氏が発表を行い、休憩を挟んで続く第2部では、富田直秀（日本デザイン学会・京都大学教授）、青木孝夫（広島芸術学会・広島大学教授）がディスカッションとなって活発な討論が行われました。当日は参加者名簿に記載した61名を含めて約80名が来場しました。

発表と討論の内容については、慶應義塾大学教養研究センターが報告書としてまとめ、いずれ公刊する予定です。秋学期には片山杜秀副所長を企画者として、亀山郁夫名古屋外国語大学学長、平野啓一郎氏（作家）によるシンポジウム「クラシック音楽を“教養”から考える」、1月には前田富士男名誉教授による研究講演会「イマジネーションの危機と可能性」（仮）が行われます。

（小菅隼人）

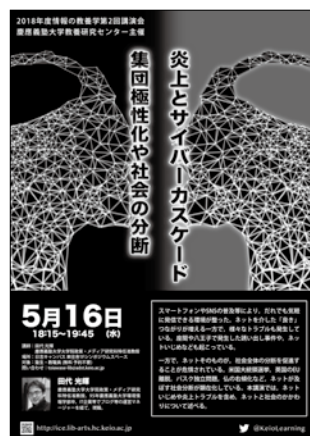


情報の教養学

春学期の講演を振り返って

2018年度春学期の「情報の教養学」では、情報の光と影というテーマで、特に情報の利用に注目した講演3件を開催しました。まず、福井健策氏（弁護士）は、漫画やアニメの海賊版オンラインサイトを題材に、著作権違反の取り締まりを阻む要因および解決しなければいけない課題を取り上げました。次に、田代光輝氏（政策・メディア研究科）は、何気なく自分と意見の合うネット上の情報を取得するため、結果として集団を形成し、それが社会分断につながる危険性について述べました。最後に、堀潤氏（ジャーナリスト）は、ネットから得る情報による大衆操作の危険性を指摘し、例えば主語一つとってもその“大小”で意味が大きく変わることを述べました。いずれの講演も、インターネット上での情報の受発信に関わることであり、ネット利用における落とし穴や注意点を知る機会として、非常に貴重でした。秋学期は、情報の技術面に注目した講演3件を開催しています。

（高田眞吾）



【情報の教養学】 2018年度秋学期スケジュール

第5回「〈弱いロボット〉的思考のすすめ—他力本願なロボットがひらく、弱いという希望、できないという可能性」

講師：岡田 美智男

10月31日（水）18:15～19:45
来往舎大会議室

第6回「フォトリソリマーが拓く未来情報化社会—材料の機能がシステムを変える」

講師：小池 康博

11月7日（水）18:15～19:45
来往舎シンポジウムスペース

日吉学 「景観編」

教育交流の場、創設にむけて

5年間にわたる実験授業を経て、2019年度より日吉学は正規科目として出発します。日吉学誕生のきっかけは、センター開設10年企画に端を発します。大学院や体育研究所の教員とキャンパスを歩き日吉の未来を語り合う中で、慶應義塾が擁する多様な教員が共同で教育プログラムを創れば、研究と教育の蓄積を生かした刺激的な授業となると考えました。テーマ設定や手法もゼロからの出発で、話し合いを重ねて創りあげました。大きな収穫は新キャンパスマップの作製、そして教員・学生にとって新しい場が誕生したこと。教員は教育手法や情報を交換し、学生共々日吉について嬉々として学び合い、最後には地元通の一貫校生と大学4年生が共同発表をまとめるなど、新鮮な教育効果が生まれました。

2018年度日吉学では初めて「景観編」を実施し、各教員が創意工夫した授業内容を持ち寄り無事終了できました。初回の9月22日では不破（経済学部）の日吉学の趣旨説明の後、まず安藤広道先生（文学部）の講義では「景観」とは自然と人間の相互作用によって作られること、そしてアイデンティティの土台としてキャンパスが行動や考え方のパターンを規定し、文化となりうるということ。景観史を通してキャンパスデザインを考える視点を提示なさいました。

9月29日は阿久澤武史先生（慶應義塾高等学校）が1932年に林塾長が掲げた「理想的学園を建設する」思いは第一校舎やキャンパスのデザインに読み取れるのか、どのような未来像を描けるか、最終課題への方向付けをなさいました。

10月6日、福山欣司先生（経済学部）の自然編では、人はなぜ緑を見ると快適と感じるのか、成長と季節変化がある緑が景観へ及ぼす影響について考えました。日吉キャンパスの航空写真20枚を時代順に並べ替える作業に学生も教員も大興奮。大出敦先生（法学部）はミニ講義で最終発表に向けて学生の注意を喚起していただきました。

10月13日、太田弘先生（慶應義塾普通部）地理編では、地図から社会事象を読み解く第一人者今尾恵介先生の基調講演と質疑。日吉にキャンパス立地を選んだ理由を、地形と東急の田園都市構想の観点から推定。さらに将来の慶應義塾の仮想Hubキャンパスの立地について、グループ発表をしました。

10月20日はグループで発表準備、27日はリハーサルで教員の集中砲火を浴びつつ修正後、無事発表終了しました。キャンパスを歩き写真に収め、第一校舎や木々を「観察」、未来のキャンパスデザインを考えた結果、いずれの発表も異なるキャンパスと学部、一貫校生が学べる「交流の場」あるいは多様な学生や教員が出会える「広場の拡充」を望む結論となったことが印象的でした。（不破有理）



日吉行事企画委員会（HAPP）

春学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）は従来、春学期に新入生歓迎行事を、秋学期には塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催してきました。2018年度からはしかしながら、活動の方針を変更し、主に春学期に開催する、委員会が主体となって催すイベントについては、「新入生歓迎行事」という位置づけをやめ、日吉のキャンパスコミュニティ全体に対して行う企画という性格を持たせることにし、「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」という形で新たにスタートすることになりました。ここでは、できるだけ継続性の強い催し物を優先して開催していく予定です。もちろん、従来のような新入生をターゲットに特化したイベントも催していきます。

日吉で開催される2018年度の新入生歓迎行事は、昨年同様、8つの企画がスケジュールされました。毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、塾長との交流を目的の一つとしている「塾長と日吉の森を歩こう」、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」、日吉メディアセンターの中でのコンサートなどが催されました。また、経済学部において、すべての授業が英語で開講されているPEARLが2016年度秋学期より始まり、これにともない、ある程度まとまった数の9月入学の新入生が日吉キャンパスに存在することとなりました。これに対応する形で、秋学期に行われる行事の数を増やし、また、日本語を理解しない学生にも対応できるイベントを行っています。HAPPの活動の詳細は、HAPPのホームページをご覧ください。

<http://happ.hc.keio.ac.jp/>

（石井明）

「HAPP」2018年度新入生歓迎行事一覧

「歌舞伎のみかた、楽しみかた 犬丸治氏講演会」
4月7日（土）来往舎シンポジウムスペース

「壺井明 連作祭壇画『無主物』の展示と講演会」
4月23日（月）～27日（金）
来往舎イベントテラス、シンポジウムスペース

「ライブラリーコンサートin日吉
——図書館がコンサートホールになる2日間——」
5月15日（火）・22日（火）日吉メディアセンター

「物語の世界No.5：亀山郁夫講演会
神になりたかった男 ドストエフスキー『悪霊』の世界」
5月23日（水）独立館D201

「塾長と日吉の森を歩こう」
5月26日（土）まむし谷

「雪雄子舞踏公演」
6月8日（金）来往舎イベントテラス

「ことばの世界No.4：大谷弘道講演会
ドイツ語から見たドイツ人」
6月19日（水）来往舎シンポジウムスペース

「日吉音楽祭2018」
7月7日（土）・10月6日（土）協生館藤原記念ホール

「修行日和」の庄内セミナー

8月29日から9月1日にかけて「庄内に学ぶ〈生命（命）〉—心と体と頭と—」をテーマに第九回庄内セミナーが開催されました（参加者は学生・院生・塾員23名、スタッフ8名の計31名）。最大の気がかりは天候—庄内も豪雨に見舞われ、修験体験を指導していただいた先達の言葉を借りれば「修行日和」の中での実施となりました。

初日は、TTCKにおいて15時から六つに分けたグループ毎に「生命」をめぐるマインドマップを作成、続いて致道博物館館長・酒井忠久氏による庄内の紹介講演が行われ、丁寧かつ庄内への愛情溢れるお話を伺いました。宿舎の休暇村羽黒に移動のち、夜は鶴岡総合研究所顧問・東山昭子先生による「庄内の風土 人と文学—詩人・吉野弘の世界」と題した講演。吉野弘の作品を片手に「生きること」「やさしさ」についての感銘深いお話で、参加者との対話もとても活発でした。翌日の午前中は注連寺で湯殿信仰を中心とした佐藤弘明住職の闊達な講和を拝聴し、鉄門上人の即身仏を拝観。庄内近代化の礎となった松が岡開墾場見学を経て、昼食は知惣軒。地産地消の家庭料理を堪能し、店主・長南光さんよりキビノ織のお話も伺いました。午後は藩校・致道館の富樫恒文氏のご指導で庄内論語素読体験。藩校で講じられた徂徠学についてもお話いただきました。その後、先端生命科学研究所ラボ棟に移動、最先端をいく研究施設、そこから生み出された技術や製品を目の当たりにして参加者の目は一気に未来へ。富田勝所長の飛び入りミニ講演では皆が前に向かう元気をもらいました。夜は医学研究科委員長・岡野栄之先生による講演—生命の誕生からはじまり、ご専門の再生医療にいたる広範なお話に圧倒されつつ、ここでも活発な対話がなされました。三日目は修験体験。この日はとくに雨が厳しく、滝行と羽黒修験「秋の峰入り」最終夜の八朔祭見学を断念（期間限定・特別公開の国宝・羽黒山五重塔の内部見学はラッキーでした）。その分、グループごとのセミナー振返りとその言語化（5分間プレゼン準備）に時間をかけました。最終日は再びTTCKで5分間プレゼン、続いて打上げの昼食会で行う庄内・鶴岡への感謝を込めた2分間スピーチの準備・リハーサル。その後、短時間ながら致道博物館や藤沢周平記念館など市内自由散策。昼食会では、ご多忙の中参加いただいた鶴岡市長・皆川治氏を前に2分間スピーチ。市長はその一つひとつに対して、また参加者との交流の中で心のもった言葉を返してくださり、セミナー全体をしっかりと締めてくださいました。

個性豊かで多様な参加者に恵まれ、充実したセミナーになりました。荘内日報、山形新聞の取材も含め、セミナーにご協力いただいた皆様にあらためて心より御礼申し上げます。（羽田功）

第9回 庄内セミナー

「庄内に学ぶ〈生命〉—心と体と頭と—」

庄内セミナーを終えて

大学2年生の夏休み、何か変わったことに挑戦してみたい、そんな思いから私は庄内セミナーに応募させて頂きました。

最初は、全く知らない約30名と3泊4日も生活することはものすごく不安でした。しかし、自分から意欲的に質問をすることや、持参した話題の書いてあるカードを広げることで色々な人と交流して、より深く自分の考えを深めることができました。修行体験で私にペースを合わせて手助けしてくれた同年代の参加者、寒そうな様子を見計らって上着を貸してくれた先生、自由行動で道に迷っているとわざわざ話しかけてくれて道を教えてくれた地元の方など、たくさんの「人のやさしさ」に触れあいながら交流を図ることができました。

そして、知惣軒で食事をした際、料理のおいさに感動していると、お店の方から「“命”をいただいているからおいしいんだよ。」という言葉かけられました。そこで、普段当たり前に食べているごはんは動植物のいのちをもらっていること、我々はそういった自然に生かされていることを改めて思い返すことができました。地球上の生物は生かし生かされていて、「死ぬ」こともそのサイクルのひとつなのだな、と思いました。

それらを踏まえ、現在は「今を大切に生きていくこと」が大切なのだと感じています。そうすることで、一期一会である人とのかわわりをより濃いものとしながら、“生命”を全うした人生が送れると考えます。だから私は、自分の命ある“いま”を大切に生きていこうと、強く思います。

（文学部2年 鶴澤祐花）



注連寺山門前にて(8月30日)

第9回庄内セミナーは『庄内に学ぶ〈生命〉—心と体と頭と—』をテーマに以下のとおり、山形県鶴岡市で開催しました。
実施期間：8月29日（水）～9月1日（土）[3泊4日]
場所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）他
参加人数：学部学生21名、院生2名、スタッフ8名 合計31名
講師：岡野栄之（医学部教授）東山昭子（鶴岡総合研究所研究顧問）
参加費：無料 ※現地までの往復交通費は自己負担（現地集合・現地解散）
宿泊場所：休暇村羽黒（鶴岡市）

【関連企画】

・日吉メディアセンターの協力で庄内関連図書を展示（6/4～7/16）

スケジュール

1日目	・現地集合（鶴岡タウンキャンパス） ・「生命」に関するマインドマップ1作成 ・「庄内にまなぶ生と死」講師：東山昭子（鶴岡総合研究所研究顧問）
2日目	・即身仏拝観（注連寺） ・松ヶ岡開墾記念館見学 ・庄内藩校・致道館で庄内論語の素読 ・先端生命科学研究所 バイオラボ棟見学 ・「最新医療から見たいのち」 講師：岡野栄之（医学部教授）
3日目	・ミニ修験体験（羽黒山踏破、南蛮いぶしなど） ・対話と議論、マインドマップ2・3作成
4日目	・グループ発表 ・懇親会 終了後現地解散



庄内藩校・致道館(8月30日)



火渡り(8月31日)



山伏体験修了式(8月31日)



羽黒山踏破(8月31日)

カドベヤ

8年目のカドベヤ

2018年6月で居場所「カドベヤで過ごす火曜日」は設立8年目を迎えました。多くの人々に支えられながらここまで来ましたが、8年間、火曜日に扉を開けて、ただ人々を迎え入れるということを積み重ねてきたにすぎません。居場所を作り上げるのはそこに来る人々で、月を追うごと、年を追うごとに、来る人々も変わっていきます。小学生のころに来ていた子供たちは中学生や高校生になって部活動やアルバイトで忙しくなり、最近では来なくなりました。仕事の関係で火曜日に石川町に来られなくなった常連さんいれば、何年振りかでまた戻ってくる方々もいらっしゃいます。

つい最近も本当に久しぶりに寿地区からの住民の方が戻ってこられたことがあります。たまたま「カドベヤはどうしているかな」と思ったところ、なんと今日は火曜日、慌てて来てみた、とおっしゃいます。「入り口に明かりがついていてうれしかったよ。」このIさん、料理の腕前はなかなかで、カドベヤの手作りの夕ご飯を口にして、「食事が前よりおいしくなった」とうれしいことをおっしゃってくれます。

学生たちも同じように戻ってきます。今年は元ゼミ生で、このカドベヤを使いながら、共に「まちづくり」について考えてきた卒業生が、就職先の会社をやめて、カドベヤの運営をお願いしているコラボ合同会社に勤め始めました。

毎週火曜日の積み重ねの中で忘れがちになる時の流れは、この居場所を使っていてくれた人々が何年かぶりに戻ってくることで思い起こされることがあります。

そんな今までの活動を振り返ってみようと、2018年の2月に小冊子『居場所「カドベヤで過ごす火曜日」—7年目の歳時記—』を出しました。1月から12月までの歳時記の形式で、今までかかわってくれたアーティストや来てくれた人々、カドベヤ周辺の街並みを言葉と写真で記録した小さな冊子です。1月から12月まで、毎週火曜日の18時からのおよ3時間。昔来てくれた人、今も毎週火曜日に来てくれる人、逝ってしまった仲間たち。そんな皆の思いを込めながら、カドベヤの仲間と共に作りました。この小冊子を見て、またカドベヤの入り口を火曜日に開けてくれる新しい仲間を待っています。（横山千晶）



小冊子『居場所「カドベヤで過ごす火曜日」』

日吉キャンパス公開講座

2018 年度日吉キャンパス公開講座 「ルールと作法」を終えて

前身の「横浜市民大学講座」から数え 45 回目の「日吉キャンパス公開講座」を 9 月 29 日から 11 月 17 日の日程で開催しました。テーマに沿った話題について、日吉キャンパスの教員を中心に研究機関としての義塾が持つ知的情報源を広く公開し、塾内外を問わず幅広い年齢層の皆様へ学んでいただくことが目標です。昨年度の 16 講師 8 日間から 10 講師 5 日間となり、受講料は据え置きのままながら、定員 350 名のところ 500 名を超える応募があり（期限を待たずに応募締め切り）大盛況となりました。

今回は「ルールと作法」をテーマとし、塾外の講演者 4 名（窪田良先生、松永美緒先生、養老孟司先生、黒沢文貴先生）、塾内 6 名の陣容で、製菓・ベンチャー・宝塚・美術・宇宙・メディア・意識・生死・宗教・野球・文学・歴史・幸福・軍隊等の各分野にまつわるルールと作法についての講演がなされました。例年、「受講者の皆様が熱心にお聴き下さる」と演者の先生方から異口同音におっしゃっていただくことも多く、受講者アンケートからも「毎年楽しみ」「脳みそへの栄養になりました」とのご感想や貴重なご意見も多くいただき、今後につなげられるような機会となりました。各回の講演者・タイトルについては右表をご参照ください。また「日吉公開講座」で検索いただきますと、トップの教養研究センターの HP 上に過去の実施分についても記載がございます。（寺沢和洋）

9/29 (土)	米国で医薬品・医療機器開発に挑む価値 とベンチャー企業の役割 宝塚におけるルールと作法	窪田 良 松永美緒
10/13 (土)	「美」とは何か—ヴィクトリア朝の芸術教育 におけるルールと自由 宇宙放射線とメディアリテラシー —「百聞は一見にしかず」の先にあるもの	横山千晶 寺沢和洋
10/27 (土)	人生 100 年時代の生き方・死に方 中国宗教における死者の救済	養老孟司 酒井規史
11/10 (土)	スポーツ選手の知覚運動スキル —ボールは止まって見えるのか？ 江戸文学のルール —出版統制と自主規制の商業文芸	加藤貴昭 津田真弓
11/17 (土)	幸せになるためのルールと作法 日本軍におけるルールと作法 —捕虜問題を中心に	前野隆司 黒沢文貴



10月27日 養老孟司先生

学習相談

2018 年度春学期 学習相談活動報告

今年度は、新学期より窓口を開き相談を受け付けるとともに、新入生歓迎トークイベント「先輩から学ぶ有意義なキャンパスライフ」（4 月 25 日）を開催しました。登壇した 5 名中 3 名は、今期より加わった相談員です。学習面を中心とした学生生活全般について、19 名の参加者と活発に質疑応答が行われました。また、イベント時のアンケートでレポートの作成方法を知りたいという回答が最多であったことを受け、レポートを提出するまでの各段階の注意点を示し、スケジューリングを提案する展示を 6 月 20 日より開始しています。この展示を見て学習意欲が高まった、という声も寄せられました。相談活動のみならず、いずれの企画も、学生同士の相談という対話を通じた学び合いの中で、相談者の不

安を軽減することを目指す本活動の理念に沿ったものとなったと考えています。（日吉メディアセンター 田谷祐子）



研究サポート「研究の現場から」

〈第22回〉

ヨーロッパ・ユダヤ・オーストリアのはざまで ——S. ツヴァイクと20世紀オーストリア文学

ウィーン出身の作家シュテファン・ツヴァイクの生涯は、19世紀末から20世紀前半のヨーロッパ激動の時代に重なります。彼は時代に先駆ける前衛ではなく、時代の「中に」生きた作家として、代表作である回想録『昨日の世界』をはじめ同時代の貴重な記録を残しています。この回想録と、自死の直前に完成された小説『チェスの話』等を中心に、この作家がいかに自分の生きる時代を見つめ、書き残そうとしていたかを論じました。ユダヤ系であったツヴァイクは1938年のオーストリア併合、そして1939年の第二次世界大戦の始まりを「昨日」との決定的断絶として描いていますが、今日一般に「昨日の世界」という表現はしばしば第一次世界大戦以前の世界と同一視されてしまいます。戦後オーストリアはナチス時代の暗い過去をいわば飛び越える形で、自らの「昨日」をハプスブルク帝国時代に見出そうとし、ツヴァイクの懐古的なイメージも時にそれに利用されてきたのです。音楽や祝祭、郷土文学など様々なジャンルに及ぶこうした現象についても今後さらなる研究を進めていく所存です。

[2018年5月30日(水)開催] (杉山有紀子)

〈第23回〉

カッパが海を渡るとき ——現代北米小説における妖怪について

「カッパが海を渡るとき——現代北米小説における妖怪について」という題目で、主にカナダの日系作家 Hiromi Goto (1966年-) の小説 *The Kappa Child* (2001年) におけるカッパについて発表しました。本作のカッパは、日本固有の妖怪として、語り手の日系移民の女性が失くした日本文化の体现であると解釈されることが多い。一方で、カッパが中国大陆から移住したとする説も考慮するなら、移民の戯画、語り手の分身として読み解くこともできます。さらに、Goto 自身の言葉を借りれば、「両義的な」水棲妖怪のカッパを、カナダの乾燥した平原という異質な環境へ移住させることには、日本らしさの象徴にとどまらない創作上の仕掛けとしての可能性があります。散漫な発表になったものの、参加者からは、カッパの特異性や怪獣映画におけるカッパ的存在についての興味深いコメントや、民俗学的アプローチと小説分析をどのように併存させることができるかという重要な指摘もいただきました。記して感謝申し上げるとともに、これからの課題といたします。

[2018年10月10日(水)開催] (加藤有佳織)

【予告】第24回「研究の現場から」

「研究の現場から」は、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話していただき、参加者と語り合う催しです。軽食も出るざっくばらんな雰囲気のできるので、どうぞ気軽にお集まりください。

(高橋宣也)

▶ 2018年12月12日(水)18時15分～ 来往舎101にて
▶ 桑田 文 (理工学部)
「“November 1918” とアルフレート・デーブリン」

読書会「晴読雨読」

「田辺元『懺悔道としての哲学』を読む」

教養研究センター主催読書会「晴読雨読」の一環として「田辺元『懺悔道としての哲学』を読む」を始めたのは、2017年の10月でした。会は年度をまたぎ、2018年4月18日に第6回、6月6日に第7回、7月24日に第8回を行い、完結しました。この書物は西田幾多郎への批判に満ちております。つまり「西田哲学」に関する知識が読む前提として求められ、さらに親鸞やパスカルやシェリングやキルケゴールやニーチェやハイデggerが出て参ります。要するに難物。しかし、よき参加者を得て、全編を読み終えることができました。案内人の片山がいちばん勉強させて頂けたと存じています。そのあとを間接的に受けるかたちで、10月からは『論語』、12月からはあらたな読書会を始めます。ご参加、お待ちしております。

(片山杜秀)

「ハンナ・アレント『人間の条件』を読む」

ハンナ・アレントの『人間の条件』を読んでいます。2018年4月27日にスタートし、5月18日、6月29日、8月3日、10月12日とはほぼ月に1回、これまでに計5回開催しました。ナチスを逃れてアメリカに亡命したドイツ生まれのユダヤ人哲学者アレントは、日本でもとくに名の知れた（でも読み通した人はじつは少ない？）思想家の一人でしょう。おかげさまで、毎回20名前後の学生と教員が集まる盛会となっています。アレントが考える「公的領域」とは、多数の人が居合わせ複数の物の見方が確保されている場所のことですから、この読書会が小さな「公的領域」となるためにも、みなさんの参加が欠かせません。途中参加も大歓迎です。積読状態で家に眠っている『人間の条件』がある方は（ない方も）ぜひお立ち寄りください。

(西尾宇広)

【HAPP】 Keio Refugee Week 2018

「難民」を知るための2週間

10月29日(月)～11月9日(金)、上映会・講演会・写真展示
来往舎シンポジウムスペース、イベントテラス

【学会・ワークショップ等開催支援】鳥たちのフランス文学

11月25日(日) 10:30～16:30、来往舎シンポジウムスペース

【読書会】ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第6回

12月7日(金)、来往舎 101

【研究の現場から】第24回: 桑田 文(理工学部)
「“November 1918” とアルフレート・デーブリン」

12月12日(水) 18:15～、来往舎 101

慶應義塾大学コレgium・ムジクム演奏会

1月16日(水) 18:30～、協生館 藤原洋記念ホール

【学会・ワークショップ等開催支援】
スペイン発・多様化するアディクションにどう対応するか?

「人」中心の支援～ヨーロッパの潮流～

1月25日(金)～27日(日)、来往舎中会議室・大会議室

【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】
プレゼンテーション・コンペティション

2月上旬予定、来往舎シンポジウムスペース

【教養研究センター選書出版】

3月予定

11月

【情報の教養学】第6回: 小池 康博(理工学部)
「フォトニクスポリマーが拓く未来情報化社会
—材料の機能がシステムを変える—」

11月7日(水) 18:15～19:45、来往舎シンポジウムスペース

【学会・ワークショップ等開催支援】

日本ポピュラー音楽学会第30回年次大会シンポジウム

11月24日(土)～25日(日)、第6校舎

【学会・ワークショップ等開催支援】

国際アーサー王学会日本支部年次大会および講演会

12月8日(土)、来往舎中会議室

基盤研究「教養研究」講演会 no.3 前田 富士男

「イメージの危機と可能性」(仮)

1月16日(水) 18:15～、来往舎シンポジウムスペース

慶應義塾大学コレgium・ムジクム

古楽アカデミー・バロック・オーケストラ演奏会

1月20日(日) 14:00～、協生館 藤原洋記念ホール

【学会・ワークショップ等開催支援制度】

春学期開催分募集 申請締切

1月31日(木)

慶應義塾大学アカデミー声楽アンサンブル

カナダ バンクーバー公演

3月8日(金) 19:30～、Christ Church Cathedral,

カナダ バンクーバー

12月

2019

1月

2月

3月

私のレプリカ作り自慢

★「私の○○自慢」は今回から所員の方にご登場頂くことになりました。

自然人類学を専門とする私の主な研究対象は、人類や類人猿の「歯」です。エナメル質という硬組織で覆われている歯は化石として残りやすく、また食性に応じて形が適応進化してきたため、小さいながらも情報量が多く、人類進化の研究においても重要な資料です。手の平に乗るサイズ感が性に合うこともあり、私にとって歯の研究はとても楽しいものです。レプリカ(模型)を作りやすいことも研究対象としての歯の優れた点の一つでしょう。実物が手元になくてもレプリカがあればいつでも観察できるし、たくさん並べて同時に比較することもできます。海外の博物館などで標本を見せてもらう時は、できるだけ型取りもさせてもらえるよう交渉します。レプリカ作りには歯科用の道具を利用します。まずシリコン樹脂の印象剤で実物の型をとり、石膏や樹脂などを流し込んで模型を作ります。きちんと数えたことはないものの、これまでに作ったレプリカは優に1000点を超えているのではないかと思います。もはや趣味の世界と言わなければならない。最近参加しているミャンマーの調査では、化石資料は国外へは持ち出せないため、日本に戻ってからの研究用に歯に限らず大きな化石でも何でも型取りします。同じ歯でも、桁違いに大きい象の歯の型取りには異なるテクニックが必要です。おかげで私のレプリカ作りの技もさらに幅が広がりました。レプリカを作ってから先が研究本番ですが、まずはレプリカを作らないことには始まらないのです。

(文学部 河野礼子)



レプリカ大集合



レプリカで研究中



象の歯の型取り



Newsletter
November, 2018. No.33

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts)

発行日: 2018年11月30日 代表: 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>